

空海における神仏習合思想

熊本 幸子

はじめに

六世紀半ば大陸より日本に伝来した仏教は、聖徳太子（574-622）によって確立されたといわれる。推古天皇二年（594）、当時摂政であった聖徳太子は「三宝興隆」の詔を発し、同十二年、「十七条の憲法」を発布して、「篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり。」と仏教の信仰をすすめた。以後、仏教は日本の文化の重要な要素となるのであるが、同時に、在来日本の神との共存関係において神仏習合という形態をも生み出し、日本の精神文化に多大な影響を与えてきたのである。

その後、明治政府によって神仏分離という国家的・政治的レベルの仏教排除政策が行われはしたものの、千年以上にわたって多様な形態を展開しつつ日本文化の基層を形成してきた神仏習合思想は、今なお、われわれ現代の日本人の文化的基盤を形成しているように思われる。

そうした神仏習合思想の展開において、日本古来の神の観念を密教思想の包括的理念に融合させて、神仏習合思潮の発展に大きく影響を残したのが、平安初期に真言密教を開宗した空海（774-835）である。

ところで、神仏習合といった場合の神道とは、原始神道のベースのもの、たとえば、自然神や祖先神といった古来の民間信仰を基層とした民族宗教もしくは固有宗教としての神祇信仰を指しているのであるが、空海がこうした在来の神祇信仰からどのような思想的影響をうけていたかという点については、空海が真言密教を確立させるために著した撰述書からは窺い知ることができない。ところが、高野山の開創にあたって結界した時の啓白文には神仏習合的な思想の萌芽が認めることができるのである。また、高野山には開創以前から地主神がおり、そうした神と交渉があったことも史実としてあきらかである。

以上から、本発表は、空海がどのように密教の世界観を古来の神祇信仰と融合させて、独自の神仏習合思潮を展開していったかを、高野山における神々との習合的な諸相を手がかりにして検討していくのであるが、まずは、空海の時代以前にみられた神仏習合の現象について明らかにしておきたい。

1. 仏教受容にみる神仏習合の原点

神仏習合とは、神道と呼称されるに至る以前の土着の原初的神祇信仰が、伝来した仏教と融合調和することを意味するもので、一般には、奈良時代の仏教と在来信仰の関係において初めて見出された現象である。すなわち、奈良時代は日本仏教の大枠が形成された時代であって、在来信仰との関係においても初めて一定の型—日本人の信仰形態の祖型とも称すべき現象—が形成されたといえる。¹

しかしながら、その原点はとなると、そもそも仏教がわが国に伝来し、受容されはじめた頃までに遡ると考えられる。当時の人びとはどのように大陸伝来の仏教を受容していったのだろうか。

『日本書紀』によれば、わが国に初めて仏教が伝来したのは、欽明天皇十三年（552）百済の聖明王によって三種の事物（金銅の釈迦像、幡や天蓋などの祭具、若干の経典）が献上されたときとされる。人びとは、在来の神々—多種多様な形姿において顕現する八百万の神—と見慣れぬ仏とでは、どちらのほうが靈力があるのかおおいに戸惑い、金色に光る釈迦仏は「ほとけがみ仏神」、すなわち仏という名の神（傍点は発表者による）とよばれた。相好がきらきらした仏像はかつて見たことのない異国の神として受容されたのである。²

さらに仏教受容の最初から神仏習合の傾向がみられるのが、神衣を織って神にささげていた女性が日本で最初に出家した女性であったという点であろう。³

同じく『日本書紀』によれば、最初に出家したのは善信尼、禪蔵尼、恵善尼という三人の女性であったとある。このうちの第三の恵善尼と呼ばれる女性は「錦織壺（絹織物を織ることを生業とする者）の女石女」であると記されていることから、絹織物を織り、それを神にささげていた神祇の女性であったとみられることである。⁴

このように、六世紀中葉に仏教が公伝された時、金銅の釈迦仏は神と同一視され、神の祭祀の場に祀られたのである。しかも、わが国には、当初、僧伽としての僧が欠落していたために、聖徳太子の頃までの初期の仏法は、巫女による仏法であったことも看過できない。

ただし、この時点では、祖霊崇拜信仰が先行していた時代であって、まだ「氏神」が仏法に先行していた

のである。聖徳太子の代になって、「氏神」の社より「氏寺」が選択されるに至る。

やがて仏教のもつ護国性が統一国家に依用されるようになると「氏寺」から「官寺」が成立し、『金光明經』をはじめとする『法華經』『仁王經』といった護国三部經に代表される經典も研究されていき、国家の安寧や隆昌のために読誦がなされるようになるのである。⁵

こうして、はじめは異国の神格として受容された仏教であったが、次第に隆昌していき、やがて律令政治と並行して国家仏教へと発展していった。ただし、その仏教受容の主流はまだ国家や豪族であったということはいままでの間もない。

以上、神仏習合の原点として仏教受容のありかたを時代経過にしたがって検討してみたが、それでは奈良時代に萌芽がみられ発展していったところの神仏習合の現象とはどのようなものであったのだろうか。空海の神仏習合思潮の時代背景となるその現象について次にみていきたいと思う。

2. 神仏習合思潮の諸相

まず、神仏習合の初期の現象としては、神宮寺の建立や神前読誦がみられるようになったことがあげられる。中央・地方の大社に付属の神宮寺が建立され仏像が祀られるようになると、神社では仏教の經典を奉納したり、神前で読経したりすることが盛んに行われるようになっていった。

この現象の段階では、神がみずからの苦悩を訴え、仏法による救済を求めるという傾向がみられる。それは、神々は厳しい修行をして善根を積んだために六道のうちの最高位の天に生れたのだが、その後もさらに修行を続けて悟りを開かない限り、生死をくり返して六道をさまよう。だから神も仏法によって解脱を得ることを願うというものであった。この神の神身離脱願望に応えるというかたちで神宮寺が建立され、神の願望を満たすため神前で諸經読誦も行われるようになっていったのである。

これに近い類型に、東天竺国の大王が前世の悪業から猿神となる報いをうけ、僧に供養を願うという現報説話が『日本靈異記』⁶に述べられているのであるが、この場合も、神身が罪の報いであるとされている点では、仏の優位を示すことを特徴としている。こうした説話は仏教を普及させようとする仏教側の方便として用いられていたと考えられる。

やがて、經典⁷に基づく理論付けされた習合現象として八幡神の中央進出がみられようになるのである。

天平勝宝元年（749）聖武天皇は東大寺建立にあたつ

て、応神天皇を主神として祀る宇佐八幡を勧請して祈願した。⁸律令政府は神祇・仏教の両者を対等に扱っていたのであるが、仏教經典にいう鎮護国家の思想はしだいに朝廷の帰依を篤くし、仏教に対する国家保護は日ましに強まっていった。

こうして鎮守八幡宮が東大寺に建立され、大安寺・薬師寺にも出現して、さらに神に菩薩号⁹を奉獻するなど習合現象は一層進んでいくのである。

3. 高野山開創にみる神仏習合思想

このように、奈良朝期になると神仏習合現象がおこり、さまざまな形態へと発展していったことが窺えるのであるが、では、空海の場合、どのような神仏習合思想を展開していったのであろうか。

先に述べたとおり、空海の撰述書には神祇信仰に関する所説は見られないけれども、高野山開創のため七里結界の法を修して地鎮の式を執り行った¹⁰ときの「高野建立の初の結界の時の啓白の文」には、次のような神仏習合思想の萌芽を認めることができる。

沙門遍照金剛、敬つて十方の諸仏、兩部の大曼荼羅海会の衆、五類の諸天、および国中の天神地祇、ならびにこの山中の地水火風空の諸鬼等に白さく、（中略）

仰ぎ願わくは、諸仏歡喜し、諸天擁護し、善神誓願して、この事を証誠したまえ。あらゆる東西南北四維上下、七里の中の一切の悪鬼神等はみなわが結界を出で去れ。あらゆる一切の善神鬼等の利益あらんものは意に随つて住せよ。（『遍照發揮性靈集』第九¹¹）（傍点は発表者による。）

十方世界のすべての仏、金剛界・胎藏の兩部の曼荼羅の諸尊、五類の諸天のみならず、日本国中の天地万物あらゆる神々に、願いが成就されるよう祈願するものである。この結界儀礼では、畏怖すべき「負の神」である悪鬼神は真言の呪法によって鎮めおさえられて、尋常の神一利益をもたらす恩恵的存在の神一にならしめるのである。そうすることで七里の結界から悪鬼神を霧散させてしまう。

このように、空海はあらゆる仏、あらゆる神に祈願して七里結界の修法をおこなったことがわかる。つまり祈願される対象を真言密教の諸仏・諸天・諸神とするだけでなく高野山の神々はいうにおよばず国中の天神地祇としたのであり、真言密教の仏と日本の神々は等しく俎上にあげられている。

また、古来、高野山に祀られていた神々との交渉をはかったこともみられる。

高野山には、空海の開創以前から神奈備信仰¹²とともに水分¹³の山神である丹生津比売神の信仰一北にある天野川の水源信仰一があった。しかもこの山の山神をまつる司霊者は狩人であったが、この狩人の始祖が、後に神格化されて高野明神となっている。

ところが、高野山の開創伝説では、狩人がその狩場を高僧に献じて、山岳霊場を開創させているが、その狩人も神と祀られるのである。すなわち「祀られる者」と「祀る者」が、ともに神となっているのであり、これを丹生津比売神と高野（狩場）明神としている。¹⁴

こうした伝説の存在は、高野山が天野村に住んでいた山神丹生津比売神を祀る山岳宗教者たちによって贅を狩る狩場として管理されていたところに空海が入ってきたという史実を示すものである。つまり、空海が高野山を開創する以前から、山には丹生津比売神と高野明神という二柱の土地の神が祀られていたため、これら高野山の山神の結合がはかられたのである。高野山の中心をなす伽藍垣場の神聖なる御社山^{おんしろやま}には丹生津比売神と高野明神の社殿がともにならべ祀られているが、空海が高野山を切り開き、寺院を建立するのに先立って地主神を仏の守護神として融合させたものと考えられる。

4. 密教における神仏習合的思想

以上みてきたように、高野山開創においては、密教儀礼による結界の啓白の願文にせよ、あるいは地主神であった丹生津比売神と高野明神の合祀による勧請にせよ、空海が天神地祇と密教の仏を融合させたことが窺い知れるのであるが、空海のような立場は、その後も、東寺の境内において引き継がれている。

つまり、空海は弘仁十四年（823）に嵯峨天皇より密教の根本道場として東寺を賜ったのであるが、その同じ敷地内に平城一派の人びとの怨霊¹⁵を鎮魂するために鎮守八幡宮を建てている。

また、『東宝記』第三の鎮守八幡宮の条¹⁶には、空海が男神像二体と女神像一体の三所神とする僧形八幡神像を彫ったことも見られるのである。それは神と仏を一体化したものにほかならず、それまでの神仏の融合を一層推し進めるものとなったといえるのではないだろうか。空海はどのような理念をもって神仏の融合をはかっていたのだろうか。

すでに、東大寺に鎮守八幡宮が建立されたことは述べ、空海も東寺において鎮守八幡宮を建立したと述べたが、両者は神仏習合の展開において同じとはならないのである。

つまり、東大寺の場合、インド仏教がインドの神々

を取り入れて仏法の守護神としたように、それは日本の神々も仏法を守護するという神の護法善神化の展開にあったといえよう。その根底にはあくまでも仏教の優位性を示そうとする立場に立脚したものがあったと思われる。だが、高野山開創において展開された神仏習合思潮の諸相にせよ、東寺にみられた神宮寺の建立の場合にせよ、空海の神と仏の習合的な思想はすべて密教の包括的な世界観に立脚するもので、それは曼荼羅の世界における大日如来の顕現という観点から捉えられているのである。

真言密教の教学では曼荼羅世界の実現を特徴とする。その曼荼羅には両部の大経とされる『金剛頂経』と『大日経』の説くところによる金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅の二つがある。この金・胎両界曼荼羅は、宇宙の万有を包摂したものであり、万有すべてが大日如来の分霊・分身とされるのである。したがって、万物を大日如来の顕現であるとする密教の世界では金剛界においては慈悲が表わされ、胎藏界においては智慧が表わされ、胎藏界においては慈悲が表わされる。そして、この両界にすべての仏・菩薩などと宇宙の存在現象が含まれるのである。

したがって、このような密教教学の解釈からすれば、日本の天神地祇であれ、高野山の神々であれ、大日如来の顕現にほかならない。どのような神であっても、異端の存在ではないのである。国中のあらゆる神々も大日如来の展開した種々相であったから、空海は日本の神々を密教の諸仏に包摂し融合させていったといえよう。

以上のように、古来の神の観念と密教思想の包括的理念を融合させることによって、空海は神仏習合思想において独自の曼荼羅思想体系を構築していったことが理解されるのである。

5. 神仏習合の意義

それでは空海にとって神仏習合はどのような意義を担っていたのだろうか。

延暦二十三年（804）に入唐し、恵果阿闍梨より正統密教を伝授された空海は、大同元年（806）に帰朝する。だが、帰朝の折、漂流の難にあって、次のように神に誓願を立てていたのである。

空海、大唐より還る時、数、漂蕩に遇ひて、聊く一の少願を発す。帰朝の日、必ず諸天の威光を増益し、国界を擁護し、衆生を利済せむが為に一の禅院を建立し、法に依つて修行せむ。願はくは善神護念して、早く本岸に達せしめよと。神明昧からず、平らかに本朝に帰る。日月流るるが如くにして、忽ち一紀を経た

り。若し此の願を遂げずむば、恐らくは神祇を誑かむ。
（『高野雑筆集』¹⁷）

無事、帰朝のあかつきには、必ず神々の威光をまし、社会の安寧をはかり、人びとを救済し利益するために修禪の一院を建立して修行することを誓願したところ、神々の靈驗あって帰国できた。12年たった今、神々をあざむくことなくその時の誓願は果たせたのだと述べている。つまり、空海は真言密教による鎮護国家と済生利民¹⁸を全うすることを神へ誓っており、以後、真摯にこのことを実践し、成就することができたとしている。

ところで、真言密教の実践目的は即身成仏である。だが、その高度の理想を実現するには困難な修行・観法を実践しなければならない。それはきわめて特定の密教修行者に限られていたことから、現実社会では鎮護国家と済生利民とを標榜して密教を弘布せざるをえなかったはずである。¹⁹

当然、空海はこうした点からも密教の徹底した汎仏論である曼荼羅思想の立場から独自の神仏習合をうみだしていったのではないだろうか。おそらく、仏教受容の担い手はまだ国家支配層や豪族等の知識階級の人びとであって、一般の人びとは深遠な仏教思想を理解するまでにはいたっていなかったと思われる。その関心はもっぱらどの神が靈力や利益があるかという除難招福にあったのであり、人びとの信仰する神々は融通無碍なる自然崇拜の神々であった。

このように、空海は古代の人びとの信仰と密教を融合させて自然と調和する日本の神々を密教の仏のなかに包摂していったのである。山岳修行の中で自然と融合する環境にあって、空海も当時の人びとにもまして自然の神の威光を崇めていたと思われる。また、そうした空海の神仏習合思想は、五穀成就のための祈雨修法や満濃池・益田池の提築や綜芸種智院の創設と同様、人びとを苦しみから救済し利益するための済生利民をめざしたものであったと考えられるのである。

【本稿は「空海と神仏習合—高野山の諸相を手がかりにして—」（日本道德教育学会にて平成19年11月18日に発表）を一部加筆修正したものである。】

注

- 1 曾根正人編 論集奈良仏教4『神々と奈良仏教』雄山閣1995年。
- 2 佐藤正英『日本倫理思想史』60・61頁 東京大学出版会 2003年。

- 3 鶴岡静夫「飛鳥時代における神と仏」（『論集仏教日本史第1巻飛鳥時代』所収）170頁 雄山閣 平成元年。
- 4 敏達紀十三年（五八四）是歳条。なお、古神道では、人間生活で用いるものは、どのような物でも神にささげられるのであるが、六、七世紀の頃は、ことに人間生活の必需品である衣類が神にささげられる傾向が著しかった。神に神衣をささげるということが、信仰上重要な事柄であったのであり、その神衣を作るのは、実際には織物を織るということと同じであった。（川岸宏教『論集日本仏教史—飛鳥時代』49頁 雄山閣出版 平成元年。）
- 5 こうした仏教受容における時代の変化の態度は『日本書紀』の編纂者が記述した三天皇の三様の態度からも次のように窺える。すなわち、
第一の敏達天皇の即位前紀には「仏法を信^うけたまはずして文史を愛^{この}みたまふ」と記され、伝来の仏教をまだ信奉するに至らず、文学や歴史を重んじる傾向にあったことが推測できる。
第二の用明天皇の即位前紀には「天皇、仏法を信^うけたまひ神道を尊^{この}びたまふ」と記され、仏教と固有の神祇信仰との並存がはじまっていることを物語っている。
第三の大化改新後の孝徳天皇の即位前紀には「仏法を尊^{この}び神道を軽^{あなづ}りたまふ」と記述されるに至って、仏教への傾斜が著しくなったことが示される。
- 6 『新日本文学大系30 日本霊異記』下巻第二十四縁 163・164頁 岩波書店 1996。
- 7 『金光明経』『法華経』『仁王経』という護国三部経に代表される経典。国家の安寧とか隆昌のために読誦された。
- 8 宇佐八幡が天神地祇を代表して東大寺建立を祝福したのである。宇佐八幡神は、九州という西辺の地にありながら、靈驗があったことから、大和朝廷は早くから宇佐八幡を外敵からの守護神として信仰し、たびたび公式に祈願を行っていた。
- 9 神仏習合によって新しくあらわれてきた日本の神にたいする菩薩の称号。神は救われない身であり、それはあたかも悟りを開く前の菩薩と同じであるとする仏教優位の立場から生れてきたもの。
- 10 高野山を賜わりたい旨の奏上を行い勅許を受けた空海は、弘仁十年（819）五月に高野山開創のため七里結界の法を修して地鎮の式を執り行った。
- 11 高弟の真済が集成して編んだ空海の漢詩文集。（『弘法大師空海全集』第6巻612頁）
- 12 神体山信仰。高野山の最高峰は弁天岳で紀ノ川筋から望みうる神奈備山。神奈備山は神隠ります山の意で、円錐形もしくは笠状の美しい山の姿が神霊を宿すとされた。
- 13 「水分」は「みまくり」と読み、流水の調節や分配にあたる「水配り」を意味する。
- 14 五来 重『高野山と真言密教の研究』29～33頁 名著出版 昭和58年。
- 15 弘仁元年（810）、病気で退位していた平城上皇が、嵯峨天皇からの政権奪取を目指し挙兵したが、失敗。上皇

- は出家、上皇の寵愛する藤原葉子は自害し、その兄仲成は殺害された。葉子の変と称する。
- 16 空海の神像の立造については「三所御体同大師御彫刻也、(中略)三所中僧形八幡大菩薩 右女躰神功皇后左俗躰仲哀天皇」とあり、三体一具の形式を持する三尊形式のものであった。ただし現存する八幡三所大菩薩像には当たらない。(岡 直己『神像彫刻の研究』90頁 角川書店 昭和46年。)
- 17 空海の書簡を集成したもの。『弘法大師空海全集』7巻35頁。
- 18 すなわち生きとし生けるものを救い、人民を利益するということは、五穀成就のための祈雨修法だけでなく、広汎な民間のあらゆる社会的・文化的な実践活動を意味する。
- 19 曾根正人編 論集奈良仏教4『神々と奈良仏教』雄山閣1995年。

くまもと さちこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻D3